京 KOKON

旧東方文化研究所（京都市左京区北白川）
（京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター）

3

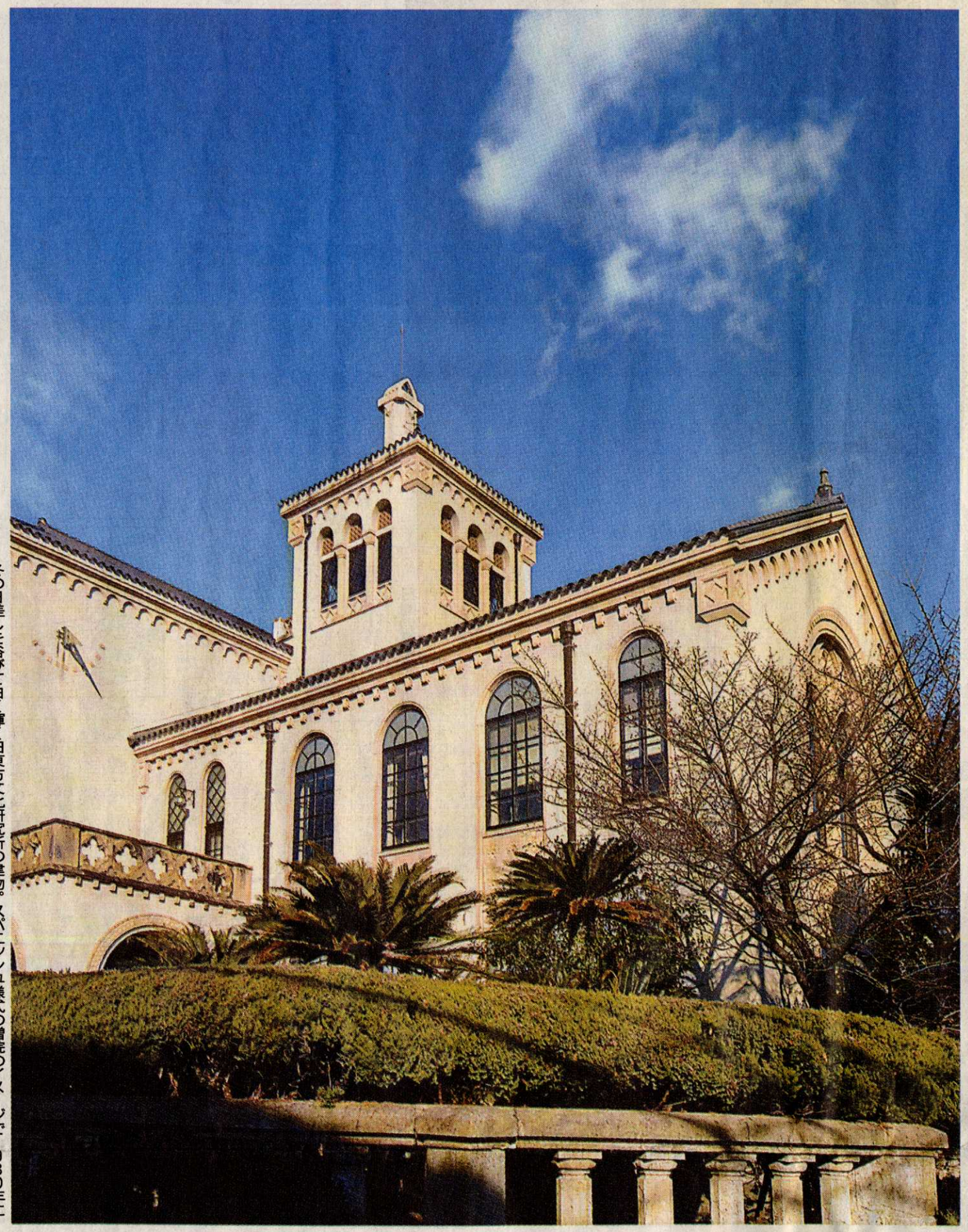
東洋の神髄に迫る
情熱、時代超えて

学問を進めるにはメディテーション（瞑想）のできる環境がふさわしいらしい。その瞑想と研鑽の空間を、東亜進出を国是とした昭和初めの外務省が可能にした。後に東方文化研究所や京都大学人文科学研究所漢字情報研究センターとなる東方文化学院京都研究所は、外務省予算で昭和五（一九三〇）年、雑木林と畑ばかりだった京都市左京区北白川に落成した。

瞑想ができる落ち着いたスペイン風僧院建築にこだわったのは考古学者浜田耕作教授。当時、大学院生として武田五一教授のもとで建築を研究していた東畑謙三氏が、浜田氏のデッサンや近代建築の巨匠ル・コルビジェの建築理念などを足掛かりに、東洋の精髄を究める西洋の館を設計した。

階段の窓のステンドグラスには浜田氏のアイデアで九州の装飾古墳の意匠が施され、玄関から回廊への境にはロマネスク風の柵を鋳造。研究室のドアコックには中国古代青銅器の形象が用いられた。時空を超えた文化が研究空間を豊かでしっくりとしたものに演出する。潤沢な資金の一部は、象革のソファとなって今もロビーで生きる。

研究所の圧巻は、中国・天津の蔵書家陶湘氏のコレクション二万七千九百三十九冊。当時北京で留学中の倉石武四郎氏が折衝し、明清の叢書数百種を一括購入した。



冬の日差しを浴びて白く輝く旧東方文化研究所の建物。スパニッシュ様式の僧院のイメージで1930年に創建された当時のままにくっきりとそびえる。日本が世界に誇る中国研究、東洋研究の数々がここから生まれ、塔屋などに十数万の漢籍が納められて研究に生かされている（京都市左京区北白川東小倉町）

吉川幸次郎氏が「価は三万円。研究所の建築が四十万円で出来た時代であり、政府が出ししぶるのを、無理解なりと、老先生たちいきりたたれたのを、同じく北京への留学生であったけれども、病気で数ケ月帰国中の私はきいた」と回想している。

書庫は採光のために天窓を設け、二、三、四階の中央部は吹き抜けにして書架の隅々に光をめぐらせる。書架の間の通路の床には分厚いガラス板を敷き、光を下へ配った。電灯による出火を恐れたからだ。

研究室は中庭を囲む回廊に配され、森鹿三氏は「…狩野（直喜）先生は南側が暖かくてよかろうというので、南側中央の大型を経学文学研究室とされ、浜田先生は鬼門に当る東北角の大型をあてて考古学研究室とされた」と記した。アルケオロギアとは考古学園のこと。所員らに配られた鍵

文化報道部　河

は自分の研究室と玄関と図書室の三カ所だけ開く。「時間の拘束を受けずに仕事のできるという思いやりには頭がさがる」と。

研究の情熱は、戦中も中国の古典「尚書」や雲崗石窟などの共同研究に注がれ、戦後、数々の成果が出版された。創設期を知る学者は皆鬼籍に入った。しかし東洋の神髄に迫る気迫は時局を超えて生き続ける。

阪神大震災の折、建物の一部がいたみ、修復を機に建物の全面改修が進んだ。曽布川寛京都大学人文科学研究所教授は「やがて文化財に指定されるでしょう。豊かな資金を生かしてすばらしい建築に仕上がっているのですから」と話す。

東方文化学院京都研究所から東方文化研究所、京都大学人文科学研究所本館、同研究所附属漢籍文献センターを経て、今、人文科学研究所附属漢字情報研究センターになった建物。そこで、全国の大学図書館の職員や研究者らが漢籍の取り扱い方や書誌を学び、東洋学文献目録が発行し続けられている。漢文が日常から遠ざかりつつある現代、漢字を基礎にした東洋文化研究の拠点はますますその比重を増している。

《次回は2月24日予定》

天窓からの光で1階の机や書棚の隅々まで明るい京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター（旧東方文化研究所）の書庫。線装本や洋綴じの中国書籍などが高さ3㍍を超える書架にびっしり並ぶ。床の分厚い透明ガラスは近年、女性の利用者を配慮して覆いを施した

きゅうとうほうぶんかけんきゅうしょ　京都市左京区北白川東小倉町47、☎075(753)6997。戦後、京都大学人文科学研究所の本館になり、現在は同研究所附属漢字情報研究センター。蔵書は全国漢籍データベースで検索でき、月曜―金曜の午前9時半―正午、午後1時―4時半に図書室（旧講堂）が開かれ、学生や研究者が利用している。年末年始など休館。

部　光男　写真報道部　井上　匠